

思春期の心性に関する研究 ()

親の期待との関係

木 澤 光 子

家政学部家政学科家政学専攻

(2004年9月22日受理)

A Study on Adolescent Mentality()

The Relationship to Parents' Expectations

Department of Home Economics, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

KIZAWA Mitsuko

(Received September 22, 2004)

1. はじめに

2004年6月、長崎県佐世保市において、小学校6年生の女兒が同級生の女兒によって殺害された。そしてこの9月15日、事件の審判が下され、加害女兒は児童自立支援施設への入所が決定し、送致された。

審判の決定骨子は、次の3点である。対人関係や社会性・共感性の発達が未熟である。怒りなどの不快感情については、それを回避するか、相手を攻撃するかと言う両極端な対処行動しかできない特性を持つが、精神病性の障害と診断されるにいたらない。会話でのコミュニケーションが不器用な女兒にとって、交換ノートやインターネットが唯一安心して自己を表現し、存在感を確認できる「居場所」になっていた。被害者の命を奪ったことの重大性や遺族の悲しみを実感できない。女兒の家庭にはこうした女兒の資質上の問題を解消できるだけの機能が備わっていない、であった。

報道によると、女兒は幼いときから1人で

遊ぶことが多く、家庭では育てやすい子、手の掛からない子と見られていて、親は積極的に関わることをしてこなかったと言われる。このような凶悪な犯罪を犯すと思われなかった児童について、精神鑑定まで行い、慎重に分析がすすめられたようである。今日の子どもたちの様々な問題に対し、複雑な要因や条件を丁寧にあげて、子育てやその環境を見直さなくてはいけないのであろう。

そこで本研究は、第報に続き、思春期の心性に関する研究を行い、思春期に当たる子どもたちの心のあり方について分析を試みた。昨今よく言われる「良い子が危ない」とか、「親の期待に応えようとして過剰適応している」のように、親の期待は子どもの負担となり、悪影響を与える悪玉とみなされることがたびたび見られるようになってきた。しかし親の期待は、子どもの肯定感を育て、好ましい行動の動機にもなるものである。

そこで本研究では、親の期待が子どもの行動にどのように影響を与えているのかを明らかにし、どのような期待の仕方をするのがよ

いのかを見いだすことを目的とする。

2. 方法

(1) 調査日及び調査場所

平成15年7月上旬～下旬に、愛知県M中学校及びH小学校に調査を依頼し、協力を得た。

(2) 被調査者

被調査者は表1の通りであり、そのうち回収したものはM中学校2年生222人、H小学校5年生60人、6年生37人の計319人である。

(3) 調査の手続き

授業時間の一部を使い、担任により質問調査票を配布、その場で回答させ回収した。

(4) 調査内容

調査内容は、学年、性別などのプロフィールと現在の精神状況、学校生活、相談相手、家族との関係についての全17項目である。

質問1には小問30問があり、「いつも」「時々ある」「ない」の3件法で回答するよう

にした。また、質問2から質問17までは選択肢をあげ、その中から選ぶように指示した。

(5) 結果の処理法

結果の処理は、解析ソフトSPSS 8.5を用いて統計的処理を行った。

3. 結果と考察

(1) 親の期待度による子どもの不安の感じ方について

「あなたは親に期待されていると思いますか」という質問に対して、「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3件から1つ選択してもらった。それと、その他の各質問とのクロス集計を行い、 χ^2 検定を行った結果、5%以上の有意な差が認められたものについて考察する。

図1は、親の期待度別にみた不安の感じ方についてであり、1%水準で有意な差が認められた。

図1より、親に期待されているかいないかどちらとも言えない群(以後、中間群)では

表1 被調査者数

	小学5年生	小学6年生	中学2年生	合計
被調査者	125(24.7)	110(21.7)	271(53.6)	506(100.0)
回収数	60(18.8)	37(11.6)	222(69.6)	319(100.0)

人(%)

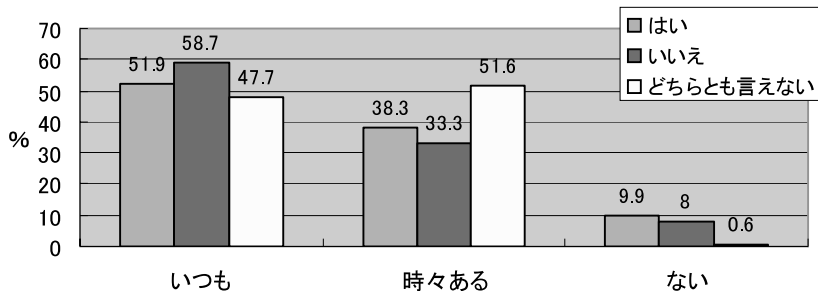


図1 親の期待度別にみた不安感

「いつも」不安になると答えたものが47.7%で最も低く、その次に低いのが親に期待されていると感じている群(以後、期待群)で51.9%、期待されていないと感じている群(以後、非期待群)は58.7%である。つまり親に期待されていない非期待群が最も日常的に不安を自覚している。

また、不安になることが「ない」と答えるものでは期待群9.9%、非期待群8.0%、中間群0.6%であり、非期待群は不安を強く感じるもしくは不安を感じないの二極化する傾向があると考えられる。

不安を「いつも」「時々」感じるを足すと、期待群90.2%、非期待群92%、中間群99.3%であり、親の期待を時々感じている中間群が最も不安と親和的であり、何となく親の期待を感じることは、はっきりと親の期待を感じない者と比べて必ずしも好ましいとは言えない。むしろ、中間群は、親の期待を否定的に捉えていると思われる。

(2) 親の期待度による子どもの生活のゆとりの感じ方について

図2は、親の期待度別にみた生活のゆとり

の感じ方について表したものである。「とても忙しい」と「結構忙しい」を足した値が最も高いのは期待群61.7%であり、非期待群41.3%、中間群38.0%と20ポイント以上の差が見られる。また、「暇である」と答えたものは非期待群に最も多く10.7%であり、続いて中間群9.0%である。それに対し期待群は2.5%で、親に期待されていると感じている者の方が、日常生活を多忙に過ごし、親に期待されていないと感じている者及び時々期待されていると感じている者は生活に張りがなく、暇を持て余している様子が窺われる。そして、親に期待されていない群と期待を時々感じる群の生活のゆとりの感じ方が似ており、ゆとりがあるということは、すなわち何もすることがないという非充実感とつながっている場合もあると思われる。

(3) 親の期待度別にみた勉強の得手・不得手感について

図3は「勉強は得意ですか」という質問に対しての回答を、親の期待度別にみたものである。勉強を得意と思っている回答「得意」と「やや得意」の回答を足した値をしてみる

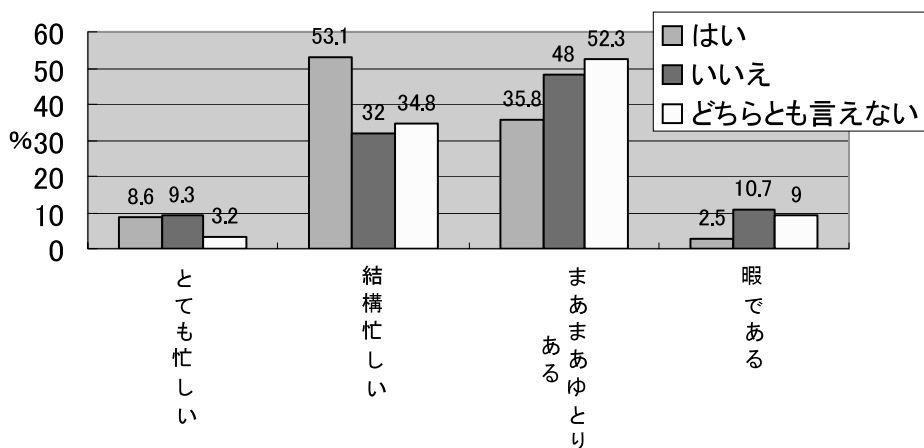


図2 親の期待度別にみた生活のゆとり感

と、期待群29.6%、中間群12.9%、非期待群9.3%であった。

一方、勉強を「苦手」と感じている者は期待群12.3%、非期待群20%、中間群21.3%である。また「わからない」と回答した者を見ると、非期待群33.3%、中間群22.6%、期待群9.9%であり、親に期待されていない者は、勉強に興味・関心が向かいにくく、回答が曖昧になるのではないだろうか。この結果より、親に期待されていると感じている方が、勉強に自信を持っている傾向が高く、ときどき親に期待されていると感じる者は、勉強について3群のうちで最も苦手感を持っていること

がわかる。

また親に期待されていないと感じている子どもは、勉強に対しても興味・関心が希薄なのではないかと考えられる。

(4) 親の期待度別にみた学校生活の満足度について

図4は、「学校生活に満足していますか」という質問に対する回答を、親の期待度別にみたものである。図4より、「満足している」と答えた者は、期待群25.9%、非期待群21.3%、中間群12.9%であり、親に期待されている者は、学校生活を楽しんでいる者が多

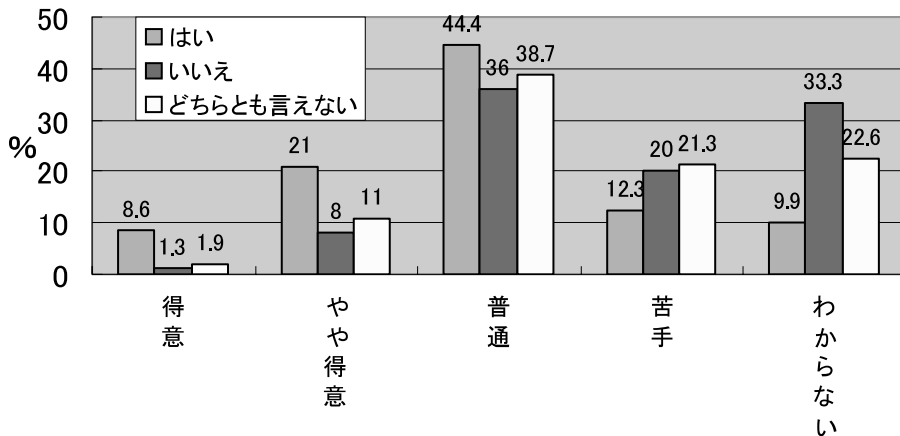


図3 親の期待度別にみた勉強の得手感

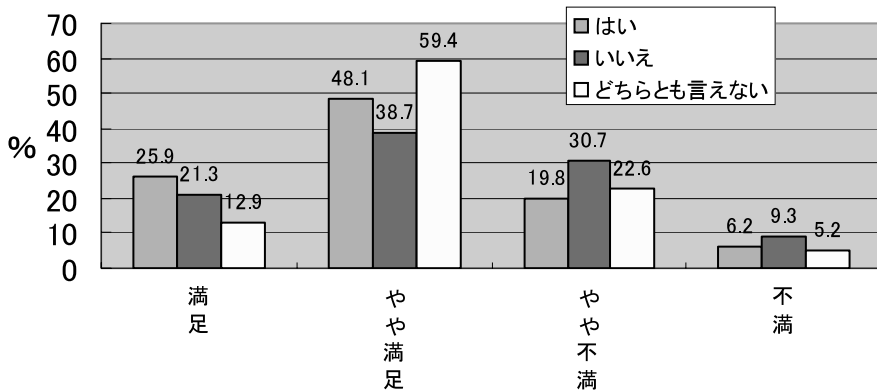


図4 親の期待度別にみた学校生活の満足度

い。また「満足している」と「やや満足している」を足した値を見ると、最も高い群は期待群の74%，続いて中間群の72.3%，最も低いのが非期待群で60%である。親に期待されている者は、学校生活をより楽しんでおり、4人中3人は学校生活に満足していることがわかった。一方非期待群のうち5人に2人は学校生活に不満足であり、親に期待されているという感じ方の影響は、子どもの生活全般に認められる。

(5) 親の期待度別にみた友達の量について

図5は「あなたには友達がありますか」という質問に対し、「たくさんいる」「ふつう」「少しいる」「いない」で1つ選んでもらった結果を親の期待度別にみたものである。この結果より、「たくさんいる」と答えた者は、期待群61.7%，非期待群40%，中間群37.4%であり、親に期待されていると感じている者は、友達が多いと感じている傾向が高い。それに比べて中間群は「普通」と答える者が多く、56.8%の半数以上の者が曖昧な回答をしている。

期待群ははっきりと友だちがいると言明し、関係が良好であることを伺わせる。しか

し、中間群は友だちが沢山いると言明する者が期待群の約半分で、これは他者への関心や関係が期待群に比べると希薄であったり、友だちであると言い切る自信がないためとも考えられる。

(6) 親の期待度別にみた家族との話す度合いについて

図6は、「あなたは家族とよく話をしますか」という質問への回答結果を、親の期待度別にみたものである。

家族と「よく話をする」と答えた者は、期待群では75.3%，中間群59.4%，非期待群46.7%であった。親に期待されていると感じている子どもは、家族と日頃よく会話をしており、中間群、非期待群に比べると約20~30ポイント高いことが認められる。また、家族との会話を「よくする」と「時々する」の値を足したものを見ると、期待群91.3%，中間群91.0%，非期待群は81.4%で、期待群と中間群の結果に差が見られず、非期待群に比べると家族との会話が豊かな傾向がある。しかし、その会話の内容によって、「期待されている」と感じるのか、「時々感じる」のかの違いが生じているのではないだろうか。

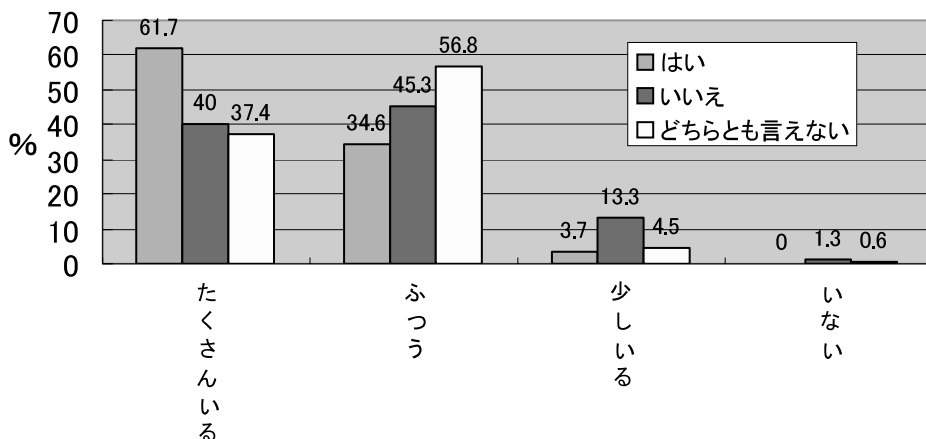


図5 親の期待度別にみた友達の量

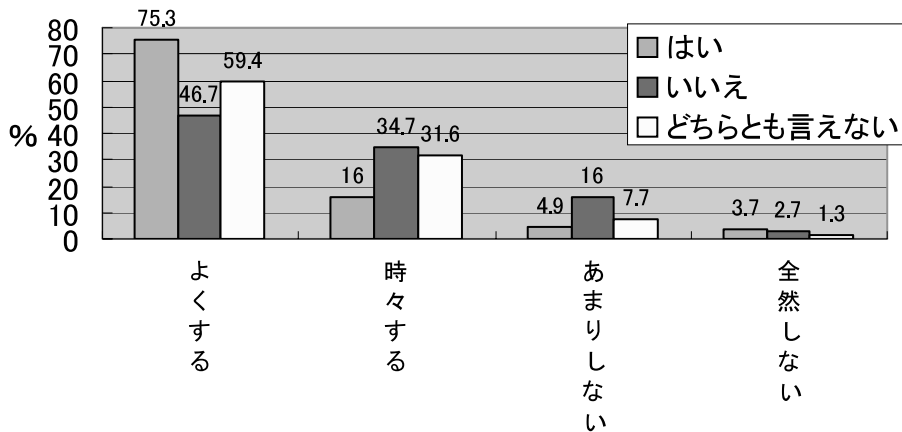


図6 親の期待度別にみた家族との話す度合い

また、家族との会話を「あまりしない」と「全然しない」の値を足したものをみると、非期待群は18.7%、中間群9.0%、期待群8.6%であり、家族に期待されてないと感じる者は、家族との会話のなさが、期待されているものに比べて2倍となっている。

家族に期待されていないと感じるものは、家族と疎遠になりがちで、一層疎外感や非期待感を増強させていくことになるとと思われる。

4. 要 約

本研究は、第 報に続き思春期の心性に関する研究を行い、思春期にあたる子どもたちの心のあり方について考察した。昨今よく言われる「良い子が危ない」とか「親の期待に応えようとして過剰適応している」などの表現に見られるように、親の期待は子どもに負担になり悪影響を与える悪玉と見なされることがたびたびあるようになってきた。しかし親の期待は、子どもの肯定感を育て、好ましい行動の動機にもなるものである。

そこで本研究では、親の期待が子どもの行動にどのように影響を与えているのかを明ら

かにし、どのような期待の仕方をするのがよいのかを見いだすことを目的として調査を行った。

調査対象は愛知県の小中学生で、有効回答数は319人であった。調査結果を集計した結果、次のことが明らかになった。

親に期待されていない非期待群が最も日常的に不安を自覚し、不安を強く感じる、もしくは不安を感じないの二極化する傾向があった。

親の期待を時々感じている中間群が最も不安を感じている。

親に期待されていると感じている者は、日常生活を多忙に過ごし、親に期待されていないと感じている者及び時々期待されていると感じている者は生活に張りがなく、暇を持て余していると思われた。

親に期待されていると感じている者は、勉強に自信を持っている傾向が高く、時々親に期待されていると感じる者は、勉強について3群のうちで最も苦手感を持っていることがわかった。また親に期待されていないと感じている子どもは、勉強に対しても興味・関心が薄いと思われた。

親に期待されていると感じている者は、学校生活をより楽しんでいることがわかった。

期待群は、はっきりと友だちがいると言明し、友人関係が良好であると思われた。しかし、中間群は友だちが沢山いると言明する者が期待群の約半分で、これは他者への関心や関係が期待群に比べると希薄であったり、友だちであると言い切る自信がないためとも考えられた。

期待群と中間群の結果に差が見られず、期待群及び中間群は非期待群に比べると家族との会話が豊かな傾向がある。しかし、その会話の内容によって、「期待されている」と感じるのか、「時々感じる」のかの違いが生じていると思われた。

家族に期待されていないと感じるものは、家族と疎遠になりがちで、一層疎外感や非期待感を増強させていくことになると思われた。

親に期待されているか否かという感じ方の影響は、子どもの勉強・友人関係・日常生活など生活全般に認められた。

以上をまとめると、家族に期待されると言う確固とした感じ方は、子どもの生活全般に張りを与え、自身の肯定感を育てていると思われた。また、時々期待されていると感じている者は、非期待群と同じような結果が見ら

れることが多く、生活全般にわたる不全感を感じていると思われる。しかし、家族の期待を感じる場面である家族との会話の量について、期待群と中間群はほとんど差が見られず、よく会話がなされている。つまり、期待されているか時々期待されているかの違いを生じさせるのは、会話の量ではなく会話の質が問題になると思われる。期待群の親からの期待の内容は肯定的に受けとめられるものが多く、中間群への期待は負担となり、現在の自分を否定するものと感じられるものになっているのではないだろうか。

本研究をまとめるにあたり、資料を提供して下さった卒業生金子礼さんに深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 遠藤辰雄「非行心理学」朝倉書店, 1974
- 2) 畠瀬稔編訳「人間関係論」岩崎学術出版社, 1967
- 3) 生島浩「非行少年への対応と援助 - 非行臨床実践ガイド」金剛出版, 1993
- 4) 麦島文夫「非行の原因」東京大学出版, 1990
- 5) 「西日本新聞 朝刊」
<http://www.nishinippon.co.jp/news/2004/sasebojoji/>, 2004